

# 2017 パリ写真月間報告

## 2017 Paris photo report

市川 泰憲

Yasunori ICHIKAWA

Author JCII Camera Museum Steeringcommittee member

毎年、11月のパリは写真に関連した複数のイベントが開かれる。カメラや写真用品を主体としたサロン・ド・ラ・フォト (Salon de la PHOTO)、写真作品を展示即売するパリフォト (PARIS PHOTO) やフォトフィーバー (Foto Fever)、さらには町の写真ギャラリーが連携して作品展示が行われるフォト・サンジェルマン (Photo Saint-Germain)、出版社や個人が写真集を販売するブックフェアなども催され、パリは写真の街となる。そんなパリの街を訪れて今年で4回目、日本とフランスの写真の関係を主にレポートした。

### ■サロン・ド・ラ・フォト (11.9~13)

Salon de la Photo ([www.lesalondelaphoto.com](http://www.lesalondelaphoto.com))

ドイツのフォトキナ同様にカメラ映像機器を主体とした展示会だが、フォトキナが基本は業者主体であるのに対し、サロン・ド・ラ・フォトは、日本のCP+と同様に一般ユーザーに向けて開かれている。すでに60年以上の歴史があり、かつてはフォトキナの偶数開催に対し、奇数年開催であったが、一時期の休止期間を経て、近年はパリの見本市・国際展示会場であるParc des Expositions Paris Porte de Versaillesで、毎年開催されるようになった。

2013年に初めて訪れたときに、自国に機器メーカーがなくて、どのようにして機材ショーが成立するのか大いに気になるころではあったが、カメラやレンズメーカーはなくても、写真という分

野は十分に成立し、作品販売のパリフォトやフォトフィーバーとの連携開催を見ると、むしろ写真表現という分野での成熟した姿を見るわけで、さすがフランスは、ダゲレタイプなど写真術発明の国だと感心したものだ。

とはいっても何が最も異なっているかということ、機材展示の場に加え、複数の写真展示の場としても会場が構成されていることが、ドイツや日本の機器展とは最も異なる点ではないだろうか。

写真展示には毎年大物がメインとして設定されており、今年はブラジル生まれでパリ在住のセバスチャン・サルガド (Sevastiao Salgado) の「セバスチャン・サルガド×illy」が展示された。

これはサルガドが、ブラジル、インド、エチオピア、グアテマラ、コロンビア、中国、エルサルバドル、コスタリカなど、コーヒー農園を長期に



開会初日の朝には「Lumix G WINTER TOUR」パリ-ブリュッセル-リヨン-シークティミ (カナダ) と大書きされたバスが会場入口前に横づけしていた。聞くところによるとパナソニックのヨーロッパ本部が行っているキャラバンだという



オープン直前の会場入口前。この2倍以上の人が後ろに列をなして開場を待っている。平日の午前中ということだろうか、日本より若い人が少ないように見える



開催前日のサルガド写真展プレオープニングで挨拶をするセバスチャン・サルガド。左からヨーロッパ写真美術館館長モンテ・ロッソ、スポンサーとなったilly コーヒーのオーナー関係者、サルガド、レリア夫人、アートディレクターのサイモン・エドワード、サロン・ド・ラ・フォト会長ポドウワン・プロヴェ

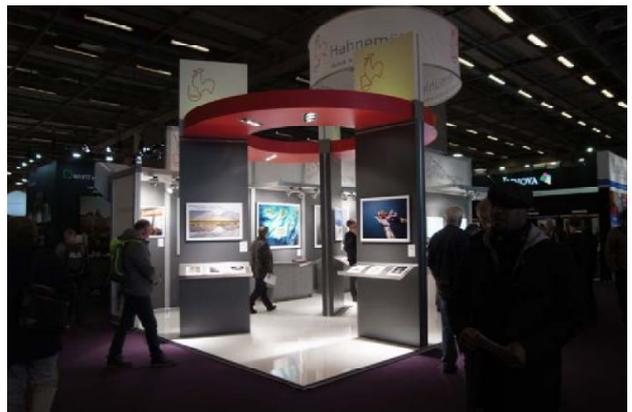


サルガドのコーヒー園の写真を見入る人々。フランスの写真展会場はどのような場所でも撮影禁止の会場はなかった

わたり撮影した作品であり、開催前日のオープニングセレモニーには、サルガドご夫妻、スポンサーとなったコーヒーマーカー illy からオーナーが



インクジェットメディアを扱うイノヴァ (innovaart.com)



日本でもよく知られたハーンエンミュレ (hahnemuehle.com)

出席し、現地マスコミ取材陣が輪を重ねるなど、写真家としてのサルガドの人気は、フランスでもなかなかなものだと感じた。

展示会場は、昨年からは増床され2階建ての建物に移っている。ブース数は約170といったところだが、1階にはフランス企業が主に陣取っていて、2階に日本のカメラ・交換レンズメーカーなどが集っている。この会場の配置は、それぞれのお国柄を表すもので、ドイツ・フォトキナではライカカメラ社が入口の1号館を場所取りするのに対し、サロン・ド・ラ・フォトでは、Canson、Innova、Hannemuhleなどのインクジェットペーパーメーカー、大規模プロラボのWhiteWallなどが、その場所を確保している。これは絵画の盛んなフランスならではのことで、画材と関係しているとのことだ。

また、フランス唯一のラボ機器メーカーであるKIS Photo-MEも用紙メーカーの近くにブースを構え、Lumiere (Ilford、Velbon)、Tetenal (Kodak Moment) 等、かつての感材メーカーが同種の海外メーカーの代



左：会場で配布されているサロン・ド・ラ・フォトのパンフレット。出展企業に対応した会場見取り図、イベントスケジュール、写真雑誌の紹介などが掲載されている。240×160mm、4つ折。  
右：サロン・ド・ラ・フォトの写真作品ガイドブック。表紙に加え、本文は印刷の質も高く、サルガドの作品がかなりの割合を占めているが、続いてフランスと日本の4人のZOOMS受賞作品の展示作品、会場内に展示されている20人以上の作家の作品が掲載されている。260×190mm、94ページ、ISBN: 978-2-9546818-4-9、10ユーロ。



欧米各地に拠点をもつ大型プロラボのホワイトウォール (Whitewall.com)、右後ろにはインクジェットメディアを扱うキャンソン (canson.com) のブースが見えている



かつてのフランスの感材メーカーであったルミエールがハーマンテクノロジーのイルフォード製品を扱っている

理店になっているようで、共同でブースを出している。さらに日本のDNP フォトイメージングなど感材系が、またエプソン、EIZOなどIJプリンター、液晶モニターなどが目についた。

このエリアにおけるフランス企業は、フォトブック、販売店などの展示が多くなる。

### ●日本のカメラ・交換レンズメーカー

2階には、日本のカメラと交換レンズメーカーがかなりの面積を占めて出展している。やはりカメラやレンズなどのハードがショーの主体になるのは致し方ない事実である。

キヤノンでは、カウンター越しにお客の要望に応じてレンズやボディを触らせて、ブースの端にはバーのカクテルカウンターを作り、アクロバティックにシェーカーを振るバーテンダーを写し止められるという実演コーナーを設けたり、2階建ての超望遠レンズコーナーでは、会場建物の対角やコーナーにのぞいて見るためのターゲットが配置されているのは新しい試みだ。

ニコンは2017年が100周年だが、それを前面に打ち出すようなことはなく、直近に発売になったニコンD850に加え、D500、D7500、クールピックスなど、手堅い機種を主体にして展示していた。ま



KIS PHOTO-ME (kis-photomegroup.fr)。フランスとしては珍しいミニラボ機器メーカーであったが、現在では証明書写真ボックス、フォトキオスクの製造販売を行っている



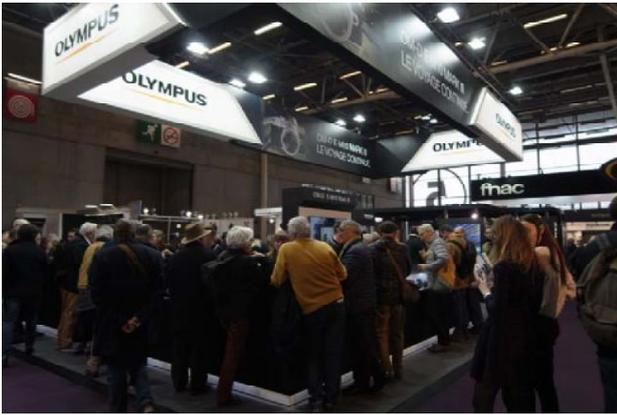
DNP フォトイメージング。毎年のことではあるが、日本企業としてはフォトキオスク製品を積極的に展示している



キヤノンブース



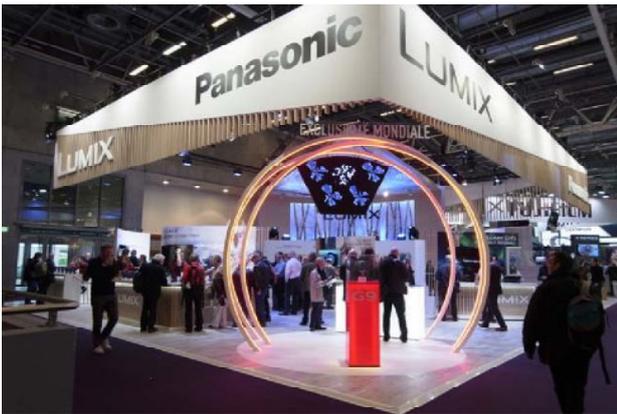
ニコンブース



オリンパスブース



フードを模した円筒を吊るしたソニーブースも見慣れてきた



パナソニックは3本の赤い発光アーチのなかに日本未発表のルミックスG9を置いてかなり目立つ展示だ



ペンタックスブランドのデジタルカメラとリコーシートが折半展示されているリコーのブース



インスタックスとGFXなどデジタルカメラを折半して展示している富士フィルムブース



タムロンブース

た会場内には、昨年来設けられたレンズ・バー・オブティックス、Mark Roberts Motion Control社のカメラ制御機器の設置などにより、ブースに特徴をもたせている。

オリンパスは、OM-D E-M10 Mark IIIをメインに据えて展示しているが、人だかりも多く人気のカメラのようだ。

ソニーは、春に発売したα9に加え、サロン・ド・ラ・フォトのタイミングで発表したα7R IIIをメインに展示するなど、ハイスペック、高級機化へとαシリーズはまっしぐらだ。

パナソニックは、やはりこのタイミングに発表

したルミックスG9を前面に打ち出して展示。ブースには赤く発光する3本の円柱下にケースを置いて展示し、赤いアーチの上ではプログラム状のG9が5台回転している目立つ展示スタイルだ。G9はスチル写真を撮るのに重きを置いて開発されたというが、展示も力が入っている。

リコーは、ペンタックスK-1、ペンタックスKPの通常カメラに加え、360°カメラのシートを1つのブースできれいに半々に分けて展示というのが、ここ数年来のスタイルだ。

同じく富士フィルムは、インスタントカメラとデジタルカメラをやはりきれいに分けて展示して



シグマブース



ケンコー・トキナーは、フランスの子会社コーキンフィルターブースにトキナーレンズと三脚を展示



イタリアの三脚メーカーであるマンフロットのブース



左：韓国 SAMYANG、右：中国 LAOWA の展示ブース

いる。さすがインスタックスの前には若い女性が集まっているのは世界共通だ。

交換レンズでは、タムロン、シグマは単独のブースを設け、ケンコー・トキナーはフランス子会社であるコーキンフィルターのブースにトキナーFiRIN交換レンズを前面に打ち出すなど、いままでにないブーススタイルを作り出したのが新しい。

またタムロンでは、タムロン100～400mmF4.5-6.3 Di VC USDの発売を、サロン・ド・ラ・フォト開催の時期に合わせるなど話題性を高めている。



会場でフランスならではの見せ方ではないだろうかと感心したのが、ソニーとキャノンである。左：ソニーはブース中央の天井の鉄骨から吊るされた長い布を伝ってかなり高い所で女性モデルがアクロバット演技をしていた。右：キャノンは、自社ブース内の超望遠レンズコーナーから20・30・40mなど離れた所の天井に鳥や猿の大きな写真を複数吊りし、超望遠レンズのターゲットとして設けていた。いずれも日本ではなかなか考えられない設定であり、パシフィコ横浜で行われるCP+だと、運営組織と施設の対応はどうなるだろうかなど考えさせられた。

## ●海外企業の動き

このほか海外企業を見てみると、ライカがまったく見えなくなったことが気になる。2015年までは、日本企業と同様に単独にブースを設けていたが、2016年では技術提携した中国の携帯電話メーカーであるファーウェイが事実上肩代わりしたような感じであったが、今年は、ライカもファーウェイも見ることができなかった。

ライカカメラ社にはこのような展示会に出展するよりも、自社の直営店舗で単独開催した方が効果的だという考え方があると、関係筋から聞いたことがあるが、出展がなされなかったのは、そのような理由によるものなのだろうか、詳細はわからない。

また、2016年にはライカカメラ本社のあるウエッツラーのライツパークにファーウェイとの研究開発センターを設置すると発表されていた。さらに2018年6月頃には、ライツパークに200室未満のホテルと博物館を含む事務棟が竣工するといわれているが、どのような形で登場するのだろうか楽しみだ。

最近話題の韓国と中国のレンズメーカーでは、サムヤンとラオアが隣合わせた場所で展示していたが、販売代理店の



自身の作品「傘の、ある日。」の前に立つ片上久也さん



自身の作品「emission」の前に立つ山田憲子さん



日仏 ZOOMS 受賞者 4 人と日仏写真専門誌編集者のディスカッション。写真は日本側受賞者である山田憲子さんが、自分の作品を解説しているところ



日仏 4 人の受賞者の作品が飾られている ZOOMS のコーナー

関係だろうか。韓国の新興交換レンズメーカー Irix はますますの広さで独自ブースを出していた。

このほか Carl Zeiss は日本カメラメーカーの隣にブースを構え、さらにその隣にはフランスの STARBLITZ がブースを構えて STAR Lens を出品していた。韓国・中国勢の交換レンズは、ここ数年来それなりの安定したポジションを得たようだ。

#### ●もうひとつのサロン・ド・ラ・フォト

サロン・ド・ラ・フォトが単なる機材ショーでないことは冒頭に述べたが、サルガドの写真展以外の部分について紹介しよう。

まず写真展会場が多いことだが、そのなかでも注目したいのが日仏共同プロジェクトの「ZOOMS」だ ([cpplus.jp/zooms-japan/](http://cpplus.jp/zooms-japan/))。もともとフランスでスタートした新人写真家発掘の企画で、それぞれの国の写真専門誌編集者と一般の人たちの投票によって 2 人ずつが選考される。

入賞者は、自国 (CP+ かサロン・ド・ラ・フォト) での写真展が約束され、さらに相手国 (CP+ かサロン・ド・ラ・フォト) での写真展を行うことができる。特に日本人の場合には、渡仏時には現地の著名なギャラリー担当者や作家から作品へのアドバイスを受けることができ、場合によっては作品の買い上げといったようなことも昨年あった。今年もすでに山田憲子さんの作品へオファーがあり、



フォトブックの枠を超えた豪華製本本のコーナー。フランス、イギリス、ポルトガル、ポーランド、ブラジルなど幅広くビジネス展開している ([dreambooksp.com](http://dreambooksp.com))

パリ写真界デビューの最短経路といえるだろう。

今回日本からは、写真専門誌編集者によって選考されたエディター賞の山田憲子さんと、一般の人々の Web 投票によって選ばれたパブリック賞の片上久也さん、選考者側として『月刊カメラマン』の総編集長・坂本直樹氏と『PhaT PHOTO』編集長の安藤菜穂子氏が同行した。

会場内には随所で写真展示が行われ、写真家 39 人の作品が所狭しと並べられているコーナーもあり、展示スタイルは日本の CP+ で併催されるお苗場と類似しているが、展示を行う人達は日本よりかなり上の世代が多いという印象をもった。



39人の写真家の作品が所狭しと並ぶ展示コーナー。皆写真を熱心に見て話し合っている。年齢構成層は高いが、日本のCP+のお苗場といったところだろうか



写真家39人の作品コーナーに日本の新宿の夜景だろうか、日高屋の看板を写して裏焼にしたカットを見つけた。画像をいくつか重ね合わせた合成写真のようだ



フォトフィーバーのコーナー。どうやらサロン・ド・ラ・フォトとフォトフィーバーは提携しているらしく、同じIDコードで20%割引で入場できる



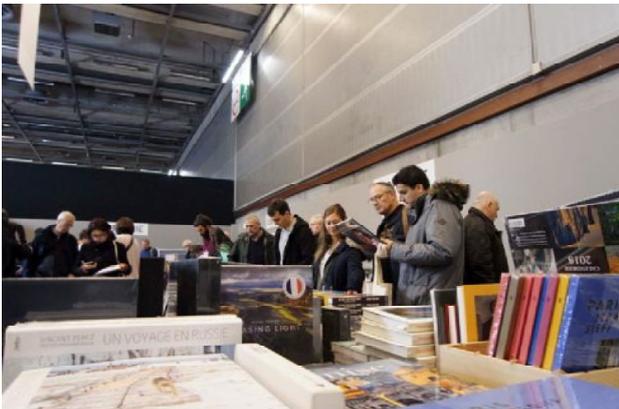
作品展示は会場内あちこちらになされている。総じて熱心に見ている人が多い



カメラと使い方のアドバイス。参加者は皆さん熱心に耳を傾けている (Nikon Passion)



パリ市内で行うグループ写真教室の受付カウンター。講座数、教室数は多く、一例として、日曜日9:00~13:30の1回の講座で89ユーロである (www.zoomup.biz/)



写真関連書籍の販売コーナーはにぎわっていて、熱心に見ている人が多い



今回の主展示であるサルガドの写真集販売コーナー。このほかカメラの使い方、分野別のノウハウ本などと豊富だ



あいにくの雨、会場となるグランパレ (Grand Palais) までの道はなぜか封鎖されていて、解除後に近づけた



毎回、不思議とパリフォトの入場前には日本での知人に会うことが多い。今回は、日本カメラ編集部の村上仁一さんに会った。通訳を伴って2泊の弾丸取材だという



グランパレに入場するには、セキュリティーチェックを受ける。これは各国のイベントでここ数年来日常的となった



正面入り口から入場するとこの混雑ぶり、まず会場内のパンフレットを見て注目のギャラリーを見て歩くのが効率がいいが、端からローラー作戦で見て歩くと意外な発見がある

## ■パリフォト (11.9～12)

PARIS PHOTO ([www.parisphoto.com](http://www.parisphoto.com))

日本で写真がおかれている状況において、欧米に比べると大きく異なるのは、写真を作品として売買する習慣、写真を展示する環境がないといったことを指摘されるが、このあたりは専門家がさまざまな場で述べているので、ここではあえて触れないことにする。



2017 パリフォトカタログ

とはいっても、ここ数年、写真作品売買の場としてのパリフォトの存在は大きく、日本からもギャラリー関係者やキューレーターなどの専門家だけでなく、写真家を志す若い人たちがこの時期にパリを訪れるのはひとつのトレンドとなっているといっても過言ではない。パリフォトは今年で開催21年目だそうだ。私自身はこの分野は専門ではないが、過去2013年、2015年、2016年と訪れており、今年で4回目の訪問ということになる。そのような時間経過のなか

で見てくると、従来の歩みがプラス拡大方向に向かっていったのに対し、初めてマイナス縮小方向に向かったような印象をもった年となった。

もちろんこれには異論がある方もいてまったく不思議はないのだが、パリフォトを始めとしていくつかのイベントのなかにそのような動きをかくすかに感じた年となった。

まず会場に入って最初に見えたのは、昨年正面入り口前に大きく目立つ存在だった「タカ・イシイギャラリー」が最前のA列から、B列へ移動してスペースも1/3ほどに縮小していたことだ。念のためと調べてみると、最前A列の16・18・20・背面B列の21・23・25で1ブロックを構成しているが、2016年、2017年と比較してみるとこのブロックから動いたのは2つのギャラリーで、残りはそのまま、さらに2013年までさかのぼると2社が変わらずに2017年でもこのブロックにとどまっていた。

そこでA列の端から見て歩くことにした。まず最初に目についたのが、パリにある「POLKAギャラリー」だ。ポルカ・ギャラリーは、2015年にフォト・サンジェルマンで訪れたときに、あいにく休廊だったが、たまたま通りかかったギャラリーの女性に脇の扉から入れてもらったので好感をもっていた。作



ポルカ・ギャラリー (polkagalerie.com)



マグナムのWerner Bischofの作品 (pro.magnumphotos.com)



タカ・インシギャラリーでは、昨年は築地仁さんの作品が前面に打ち出されていたが、今年は濱谷浩の作品が目についた (takaishiigallery.com/jp)



西野壮平のジオラマ地図を展示するロンドンのミッシェル・ホッペン・ギャラリー (michaelhoppengallery.com)

家も身近なところでは、セバスチャン・サルガド、柴田敏夫、森山大道等の作品を扱っている。

その近くには、マグナム・フォト「MAGNUM PHOTOS」が出展していた。マグナムといえば、1947年にロバート・キャパ、アンリ・カルティエ＝ブレッソンなど4人の写真家が設立した集団であることはよく知られている。ブースに1歩足を踏み入ってみると、最初に目に入ったのが雪降る中に傘をさして神官が歩いているのと、龍安寺の石庭のプリントだった。作風からしてマグナムの日本人写真家＝濱谷浩かとも思い、作者名を確かめるとWerner Bischofとなっていた。神官の歩く写真はジャズCDのジャケット写真としても使われている。マグナムという、いままでは報道的な写真のイメージが強かったが、こういう時代だどどのような傾向の作品がビジネスとして成立するのだろうか。

日本人作家だからといって日本のギャラリーだけが扱うのではなく、ロンドンの「Michael Hoppen Gallery」では、西野壮平の地図を貼り合わせた大型作品、さらには深瀬昌久のFAMILYを扱っていた。

アキオ・ナガサワ ギャラリーでは、細江英公、森山大道、荒木経惟、須田一政等大御所のプリントを多数展示していた。

また、東京の「MEMギャラリー」は、昨年は1930



同じくミッシェル・ホッペン・ギャラリーでは、日本人作家の深瀬昌久のFAMILYを展示。2015年はBUKUBUKUだった



アキオ・ナガサワ ギャラリーでは細江英公、森山大道、荒木経惟、須田一政等大御所のプリントを多数展示 (akionagasawa.com)



東京の「MEM ギャラリー」では、1950年のビンテージプリントを出品 (press.parisphoto.com/onishi-shigeru-2/)



小型のプリントを多数張り付けた、カツノブ・ヤグチ / ケイコ・オガネギャラリー (keikooganegallery.com)



会場内には写真集の販売コーナーも設けられていて、人気を呼んでいた

～40年代の大阪にあった丹平写真倶楽部会員のビンテージプリントを展示していたが、今年は1950年の日本人Onishi Shigeruのビンテージプリントを大々的に扱っていた。昨年に引き続き、50年以上前の日本人作家のビンテージプリントの扱いだが、その発掘作業は大変だろう。

キッケン・ベルリンギャラリーは、毎年日本人作家西山清の作品を扱っているが、今年も2点展示していた。

変わったところでは、茨城県の水戸市から出展している「Katsunobu Yaguchi/Keiko Ogane Gallery」は、小型のプリントを壁面いっぱい2面にわたり貼り付け展示し、作品群の脇にはLCDディスプレイを設置したり、さらに間には便器を壁に縦に埋め込むなど、他ギャラリーとは違う



KICKEN BERLINは、毎年日本人写真家である西山清の作品を扱っている (kicken-gallery.com/)



PAGE/MACGILL ギャラリー。ニューヨーク・北京、香港、ロンドン、パオアルト、パリにオフィスを構え、ハリー・キャラハン、ロバート・フランク、リチャード・アベドン、アービング・ペン等の作家を擁する (pacemacgill.com/)



フランス actes-sud の新刊写真集の販売 (actes-sud.fr/)



古書がメインの神田神保町「小宮山書店」ブース



ライカカメラの「OSCAR BARNACK AWARD」の展示



「HUAWEI GALLERY」

方向で展示し、目を引いた。

例年と何が違うかということであるが、少なくとも日本の関係では、昨年、山崎博で初出展の「EMON ギャラリー」は今年は見当たらなかったし、「タカ・イシイギャラリー」の後退などを見ると、ギャラリービジネスの難しさを感じざるを得ない。

このほか、会期中すべての日に作家による「アーティストトーク」が開かれ、初日には日本でもよく知られるエリオット・アーウィット等3人が話すことになっていて、会期中には合計31人のトークが行われるが、日本人の写真家は1人もいない。

そして、最も異なったのは、会場奥2階に設けられていたVIPコーナー入り口の展示が見当たらなかったことである。このコーナーは、過去に森山大道と荒木経惟のサインと大型作品展示がゲート脇へなされたが、今回は同種の展示はなかった。なお2017年のVIPルーム内には、MHD モエ・ヘネシー・ディアジオ社のシャンパンである“ルイナール”の名を冠してKYOTOGRAPHIEで公開された「The Yokohama Project」の写真が展示された。

そしてもう1つ、今までパリフォトの公式パートナーは、BMWとJ.P.Morganであったが、今年からアソシエイト・パートナーとしてLEICA CAMERAとHUAWEIが入っていた。ギャラリースペースにライカは「OSCAR BARNACK AWARD」の入選作品を展示していたが、「HUAWEI GALLERY」にはスマホやタ

ブレットで撮影した画像が展示されているのではとも思ったが、実際は器材のタッチアンドトライコーナーだった。

また、2016年はパリ東駅の周辺とコンコースが森山大道の作品「SCANDALOUS」で埋め尽くされていたり、喫茶店と書店を兼ねたLE-BALでは写真集の「PROVOKE」展が催され、70年代の学生運動や三里塚闘争の記録が、写真と映像記録で紹介されていたが、今年はそのような展示はなかった。

## ■フォトフィーバー (11.10～12)

fotofever (www.fotofever.com)

フォトフィーバーはパリフォト同様に、作品を販売するためのフェア。会場はルーブル美術館近くの「ルーブル・カローセル」と呼ばれる、地下商店街の脇にあり、便利な場所なので、わかりやすい。今年で6回目の開催となるようだが、出展料のハードルも低いようで、日本からも若い人たちの参加が多い。



フォトフィーバーのカタログ



フォトフィーバーのレジストレーション



どのブースもお客さんでにぎわっている。スペイン・バルセロナのProjekteria[Art Gallery](projekteria.net)



銀塩カラープリントで作品を構成するビジュアル・アーティストAndres Galeanoの作品解説 (andresgaleano.eu)



写真表現は普遍的なものではなく、国によって内容も価値も変わる。タイトルはwe consume wars、韓国のギャラリー



日本人作家・澄毅氏の作品を出展し、対話形式で解説をする京都から参加のGallery Main (gallerymain.com)



女性のポートレートだけで展示を構成した海外のギャラリー。やはり写真の価値は国によって変わるのだと思う



昨年は休んだが、今回で4回目の出展となるインターアート7の小林貴さん。下の作品は山並みではなく女性のヌードで、作家も女性の田口り子さんだ (interart7.com)



京王井の頭線井の頭公園駅脇にあるというキチジョウジギャラリー (kichijojigallery.com)

フォトフィーバーは、今年で6回目の開催となるが、当初はギャラリーに加え、個人の秘蔵写真展示のようなコーナーもあったが、回を重ねるごとにギャラリーが作品販売をする場として洗練されてきているところが面白い。パリフォトの作品には、価格が明示されているのは少ないが、フォトフィーバーでは、価格とともにそのギャラリーのおススメという作品には“Start to Collection”というステッカーが貼られている。

今回のフォトフィーバーには、ギャラリー80社と写真作家150人の参加があったという。



東京上野のみんなのギャラリー。大型プリントは、作家西村陽一郎氏によるフォトグラム (minnanogallery.com)



《Polycopies》セーヌ川に船を係留し、ブックフェアが開かれる。1階船室はブックストアが、2階は飲食デッキ、階下には個人的な本が並べられている (polycopies.net)



《Polycopies》1階船室、手前右：日本の出版社の「T&M Projects」(tandmprojects.com)、左後：イタリアのL ARTIERE社 (lartiere.com)



《Polycopies》1階船室、左：スペインKWI EDICIONES (edicioneskiwi.com)、右：Case Publishing、東京を拠点にした出版社で、東京とロッテルダムにギャラリーがある (case-publishing.jp)



《Polycopies》階下船室にて、日本で知り合いのマグナム写真家ANTONIO D'AGATAに会う。フランスで『Manifesto』という写真集を発売しての販売のようだ (studio-vortex.com)



《OFF PRINT》写真集を販売するオフプリントは、beaux-artsde paris (パリ美術学校)の正面奥の建物で行われる



《OFF PRINT》日本から参加の出版社もちらほらと

## ■フォト・サンジェルマン (11.3～19)

Photo SaintGermain (www.photosaintgermain.com)

パリ6区にあるサン・ジェルマン・デ・プレ地区にある、42か所のギャラリーが写真作品展示を主に行い、会期中にはそれぞれの画廊ならではのコレクションを見ることができのほか、ワークショップ、ポートフォリオレビュー、トークショーなどが行われ、Photo Book Weekをはじめ、《Polycopies》や《OFF PRINT》などの特設された場所で一般に流通する写真集以外に自費出版本、



通常は一般のギャラリーのようだが、フォト・サンジェルマンの期間中は写真を展示している (galeriezlowski.fr)



AMANA (IMA) が例年ポンピドーセンター前のYELLOWKORNERで行っていたパナソニックの「BEYOND2020」はフォト・サンジェルマンの一環として「NICOLAS DEMAN」ギャラリーで行われた

簡易コピー本などの販売がなされる。この期間連日やっているわけではないが、連日何らかのイベントがサンジェルマン地区で行われる。

このなかで変わったのは日本のアマナがいつものようにパナソニックをスポンサーにして日本の若者6人の作品を「BEYOND2020」としてアムステルダム・東京・パリで巡回展示を行っていたが、今年はサンジェルマン地区で、フォト・サンジェルマンの一環として行われた。フォト・サンジェルマンは、数年前には各ギャラリーの表にポスターが目立つように貼られていたが、今年は文字でPhoto Saint Germainと表されているだけで、少しわかりにくい。訪れた日が休日であったので、開いているギャラリーも人通りも少なかったように感じた。

### ■アービング・ペン写真展 (9. 21 ~ 1. 23)

アメリカを代表する写真家である、アービング・ペン (IRVING PENN) の生涯の作品を紹介する写真展がグラン・パレで開かれていたので見てきた。

グラン・パレは1900年のパリ万国博覧会の時に建てられ、展示会場と美術館を併設している。正面向かって左側でパリフォトが開かれ、右側の美術館でアービング・ペンの写真展が開催されていた。その展示スペースの広さはかなりなもので、地上、階上の2フロアを使っていて11に分けた部屋で、1947年のポートレート作品に始まり、1947～1951年のファッション誌「VOGUE」の誌面を飾った写真など2009年に亡くなるまでの、晩年の作品までを膨大な作品群として見せていた。

訪れたのは雨の金曜日、観客は多かった。膨大な作品を年代とジャンル順に追って見るのはかなりエネルギーを必要とするが、見慣れた作品がたくさん登場するので、それだけ日本にもその作品が紹介されていることになり、撮影していたときの機材も展示されているなど興味深く見る事ができた。



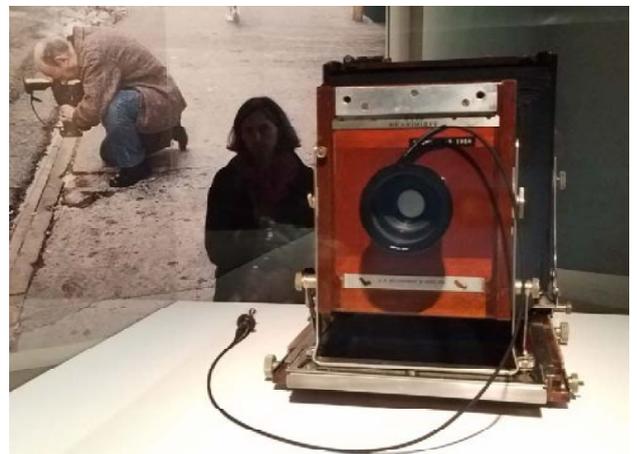
アービング・ペン作品が展示されたグラン・パレ。左奥の中央入り口の方でパリフォトが開かれている



多くの人が熱心に作品に見入っている



アービング・ペンはファッション写真家と知られているが、晩年はまったく異なった作品作りをしていた



アービング・ペンが路上でハッセルブラッドに中間リングとストロボを付けて近接撮影している姿写真の前には、そのハッセルブラッドと大判のディアドルフが展示されていた



古い貴族の館をパリ市が買い取って、美術館に改装したというが、建物外観からしても古さを感じさせる



入口脇には2017年6月に急逝した日本の写真家田原桂一氏が設計した庭があり、氏を偲んで肖像写真が掛けられていた



pierre passebon collectionneur (マレーネ・ディートリッヒ)



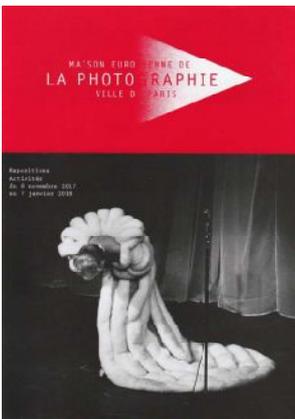
claudio mollard Une Anthropologie Imaginaire

今回というか、毎回そうであるが、実はこのパリ視察は、カメラ映像機器工業会 (CIPA) のCP+実行委員会のツアーへの同行なのだ。限られた時間の中で、フランスの写真事情にずばり入り込めることもあり、大変助かっている。

そのようなこともあり、サロン・ド・ラ・フォト、パリフォト、フォトフィーバーなど大きな催事に対し、いくつか毎回興味深い所を見て歩いたので、以下に紹介しよう。

●ヨーロッパ写真美術館 (www.mep-fr.org)

地下鉄サンポール駅から歩いてわずか2分ほど、セヌヌ川と駅の間ぐらいにヨーロッパ写真美術館 (Maison Européenne De La Photographie) はある。



MEP のパンフレット

過去にも毎年訪れているが、ここにはパリ写真界のキーパーソンといえるジャン＝リュック・モンテロツ氏がいるからだ。サロン・ド・ラ・フォトでメインの作品展示を行っているのもヨーロッパ写真美術館であり、そこで館長として采配を振っているのがモンテロツ氏だ。氏はパリ



左から、昨年の入賞者山本雅紀さん、MEP館長のモンテロツ氏、片上久也さん、山田憲子さん

フォトのスタートにも関係したと聞かすが、パリフォトとヨーロッパ写真美術館がスタートしたのが21年前と同時期であるから、そのあたりはお分かりいただけるだろう。

訪れたとき展示は6セッションに分かれていたが、パンフレット表紙にもなったマレーネ・ディートリッヒのプリントコレクションは親しみをもって見る事ができた。この日は、ギャラリーを鑑賞の後、女性のキュレーターにより片上久也さん、山田憲子さんの作品を見てもらい、館長のモンテロツ氏と昨年の入賞者である山本雅紀さんも加わり、記念撮影に収まった。



ご自身の作品を解説する Jean-Christophe Ballot 氏



通りに面して深紅に塗られた AGATHE ギャラリー



すでに展示されたであろう作品が多数置いてあった



AGATHE ギャラリーの展示。パリのギャラリーは、展示場の壁面を白く漆喰のような感じで仕上げている所が多い



すり減ったケースに入ったペンタックススポットメーター



ギャラリーの Fiona SANJABI さんに作品を見てもらう山田さん

### ● Jean-Christophe Ballot 氏アトリエ訪問

写真家 Jean-Christophe Ballot 氏のアトリエを訪ねた (jcbalot.com)。アトリエとはフランス語で、工房とか仕事場ということなのだろうが、日本の写真家の場合には、スタジオと呼んでいるのと変わりはない。Ballot 氏は遺跡や石像、墓などをテーマに活動しているとのことだが、アトリエは古い路地を入り込んだところにあり、外からは写真家の工房だということにはわかりにくい。

室内には歴代の作品が所狭しと収納されていて、少なくともこの場に写真暗室が併設されているような感じはなかった。ワーキングデスクの上にフラットベッドスキャナーが置かれているのを見る

と、時代を感じさせる仕事場だ。また別の机の上には、すり減ったケースに入ったペンタックススポットメーターを見つけたが、大判写真には不可欠な道具なのだろう。

### ● GALERIE AGATHE GAILLARD 訪問

入り口は深紅に塗られたパリ3区にある AGATHE ギャラリー (galerieagathegaillard.com) を訪問。こちらでは、ギャラリー担当の Fiona SANJABI さんに、今回の ZOOMS 入賞者の片上さんと山田さんの作品を見てもらった。今回パリ滞在中に2人の作品を見てもらう場に複数回同席することができたが、総じてフランスの識者の写真の見方は日本とは少し異なっていて、あなたはどのような考え



galerie adiran bondyの正面入り口



写真に対する質問に緊張気味に応える片上久也さん。山田憲子さんも見てもらった (galerie adiran bondyにて)

をもって作品を撮影したかということに始まり、その意識を引き出して、さらにこういう場面は？というような形で話が進んでいく。日本だと、ややもすると構図やアングル、チャンスさらにはレンズやカメラなどテクニカルな面が先行する印象もあるが、フランスでの講評は、まずは撮影した個人の考え方を大切にするのだなと感心した。

このギャラリーには、時々日本人が作品を持参するそうだが、時間が許せば見てくれるということだ。少し前にも京都から若い男性が作品をもって訪れたが、緊張のあまりガチガチだったとか。もっと気軽にということだが、営業は昼過ぎからだからということでご注意を。

#### ● galerie adiran bondy 訪問 (mindseye.fr)

昨年、訪れたときは日本人写真家、白石ちえこさんの「島影」を展示していたが、今回は昨年の ZOOMS 入賞作品である山本雅紀さんの「我が家」が展示されていると聞き訪れた。ギャラリーオーナーは元学校の先生だったということだが、山本さんの作品には好意を抱いていて、日本人の作品に理解をもっているようだ。山本さんは、すでに日本の Zen Foto Gallery より写真集「我が家」を出版していて、その後積極的に活躍している。昨



自身の作品の前でにこやかに話をする山本雅紀さん

年、ZOOMS の入選で初めてパリを訪れていたのに、わずか1年後には、パリのギャラリーで写真展を開くために滞在しているのだから素晴らしい。

こちらでも片上さんと山田さんの作品を見てもらった。

以上、期間中に巡った主な写真関係のイベント、施設を紹介した。

#### ■いま、フランスと日本は

限られた時間で、限られた場所で、見聞きしたことをもって報告としたが、過去にレポートした部分は重複となることもあるので、一部はダイジェスト的になったことはご容赦いただきたい。

今年は、昨今の日本人のパリフォトを中心とした志向も一段落したという感じがした。数年前は、知るだけでも何人かの写真を目指す若者が、パリフォトを目指しやってきていたが、今年は現地で会うことも話を聞くこともなかった。

かつて日本で写真家を目指す若い人たちが、アルル、パリへと流れてきたが、次はどここのフォトフェスティバルへ流れていくのだろうか。

また、ここ数年来パリでひとつのブームかとも思われた日本人写真家の作品展示などに対し、一部日本のギャラリーの後退などは、いままでとは違う流れが生じているのではないかと思った。とはいっても、フォトフィーバーの展示会場では、一部に参加ギャラリーの入れ替わりもあるが、若い人たちのギャラリーが、多数ブースを出しているのが目についたのも現実だ。

そのようななかで、日本の CP+ とサロン・ド・ラ・フォトの共同企画である ZOOMS 日本側受賞者の山本雅紀さんが、早くも1つの成果を見せたことは、大きな収穫だ。海外で評価を得るには、まずは日本国内での評価を得ることが近道だと感じた。

〈本報告は、カメラ映像機器工業会 CP+ 実行委員会のパリツアーに同行させていただいたレポートであり、折原直人実行委員長、並びに関係各位にこの場をお借りし、深く御礼を申し上げる次第です〉